

帯笑園保存会 会報

発行元 保存会事務局
 発行責任者 植松 善夫
 2006年01月04日
 No. 002

帯笑園の湿性植物

NPO法人浮島沼自然・里づくりの会 鈴木 昌宙

私が父と共に植松本家を訪れたのはもう半世紀近くも前の高校一年生の5月でした。バラ園を見せて頂くためです。その頃私は、バラに魅せられてバラ作りに熱中していました。

玄関を入ると、円山忠挙の子犬の衝立が出むかえてくれ、玄関横の土間の炉端で歓迎を受けました。初めてプリンを頂いたこと、咲き始めが美しいバラの中にあつて、ただ一つ散り際の名花といわれた、薄桃色の「エリザベス・オブ・ヨーク」に出会った至福の時でした。池の端にあつた植物に話が及び、「これから貴重になるからお持ちなさい。」といわれ、ミズバショウ・コウホネ・ミツガシワ等を紹介されました。そのころの私は、バラに夢中でほかの物にはまったく興味が無かったのでお断りしたのですが、後悔したのはそれから四十五年も経つてからでした。

今年8月に訪ねた帯笑園は私の思っていた、うろ覚えの記憶とは大きく違っていました。思い出の中は5月の風と、ゆつたりとしたバラ園があつて、様々な色のバラが馥郁ふいくと香っていました。

今は庭の一角に十数個の睡蓮鉢にハス、ミズバショウ、コウホネ、



ヒツジグサ、ミツガシワなどが植えられています。どの草も昔、浮島沼の至るところに自生していたものを移植して守り育てたものに違いありません。

十鉢あまりあるハスの内、幾鉢かが浮島沼にあつたハスに違いないが、名が落ちていて特定できないのが残念です。

ミズバショウは、「夏の思い出」という歌で尾瀬とともに有名ですが、尾瀬では雪解けと共に咲くこの花、ここではおそらく2月には咲いていたでしょう。浮島沼は絶滅しています。

コウホネは横に這う太くて白い地下茎が骨のように見えることから、「河骨」と書く。七十過ぎのお年寄りや子どもの頃、沼川で泳ぐとき、足にからみついたと言います。浮島沼には無くなっています。帯笑園の鉢の中には元気に育っています。鉢が浅いので、コウホネの特徴である水中葉が見られないことがちよつと寂しい気がします。

未の刻(午後2時頃)に咲くというヒツジグサ。睡蓮の仲間には花のあ

と、水中で果が熟します。今は浮島沼にあったという記録だけ残っています。ここに残っています。

ミツガシワは、高層湿原で群落をつくる、氷河期の依存植物。平地での生育地もあり、京都の深泥が池(みどろがいけ)は有名ですが、浮島にもかつては田んぼの溝に群落をつくっていました。このミツガシワだけがわずか5㎡もないところに自生しています。今、その一部を2カ所に移植し、それが順調に育っていて昨年から花を咲か



「めだかの学校」に移植して2年目のミツガシワ



ミツガシワ

せるようになりました。

帯笑園に残された5種類の湿性植物はいずれも群落をつくる丈夫な植物です。しかし、湧き水、それを貯める沼や池が失われていくと、これらの植物も耐えていきません。しかしこの貴重な植物が帯笑園にはあります。幸せなことです。

10月に訪ねたときは、ハスの鉢の間に御身丈20cmほどの石仏が雨に濡れていました。きつと長いこと帯笑園にあって、この湿地の草たちを見守っていたに違いありません。

私たちの会が「ミツガシワ」を殖やしてアクアプラザ・ビオトープに移植したように、いつかこのミズバショウやコウホネの子孫を浮島が原に里がえりさせ、富士山をバックに花たちを眺めてみたいという夢物語を小さな石仏に話しかけました。



帯笑園関連グッズ販売開始!

帯笑園保存会の活動費の足しにするため、グッズの販売を開始しました。第一弾は、「円山応挙粉本色紙」です。





一枚1000円、2枚セット1800円で見学会の際にお分けしております。ご希望の方は、見学会へお出かけ下さい。

帯笑園内の燈籠・石碑

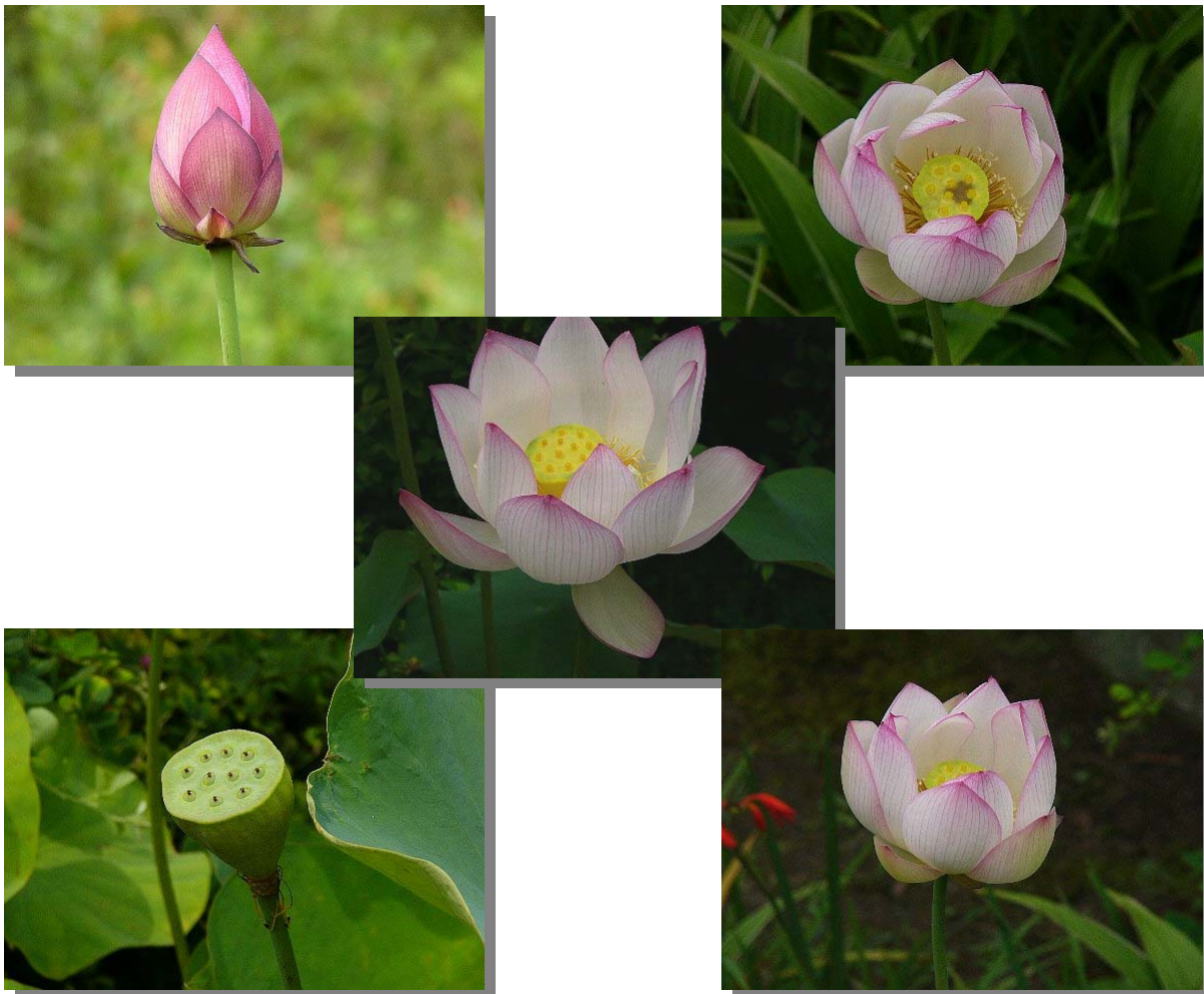
帯笑園内にある燈籠や石碑を特集してみました。今後は、これらの謂れを纏められたらいいなと思っています。会員の皆様のご協力をお願いします。



事務局からのお願い

次回の会報発行は、6月頃を予定しておりますが、会員の皆様からの投稿を募集したいと思っております。帯笑園保存へ向けての熱い思いなどを書いて頂けると助かります。なお、原稿は、申し訳ありませんが、原地区センター事務局へ届けてください。宜しくお願い致します。

七月後半〜八月にかけて咲く蓮



帯笑園見学会状況

総会以降の見学会状況は、次の通りです。

- ・ 七月十七日、十六名
- ・ 八月二八日、十六名
- ・ 十月十六日、二十五名
- ・ 十一月二三日、二十八名
- ・ 十二月十八日、十五名



九月に市報で見学会開催日の告知をしたため、原地区以外の方々の参加申し込みが非常に多くなり、申し込みの電話で地区センターの事務室がてんでこ舞いの状況となってしまいました。沼津市民の関心の高さを感じました。しかし、一方では、告知方法や申し込み方法について、反省すると共に今後の方法について深く考えさせられました。